

大規模崩壊地ホーキ籾の治山工事経過について

大井川治山センター 黒木健吾

1. はじめに

ホーキ籾は、大井川の支流である榛原川の上流部に位置する約26haにわたる崩壊地であり(図1)、センター発足(H13年)以降、下流部にダム4基、源頭部に山腹工約2.7haの治山工事を実施している。

このような大規模崩壊地の施工に当たっては、その復旧に長い年月を要するため、それに伴う問題への対応や工種の工夫を行う必要があった。

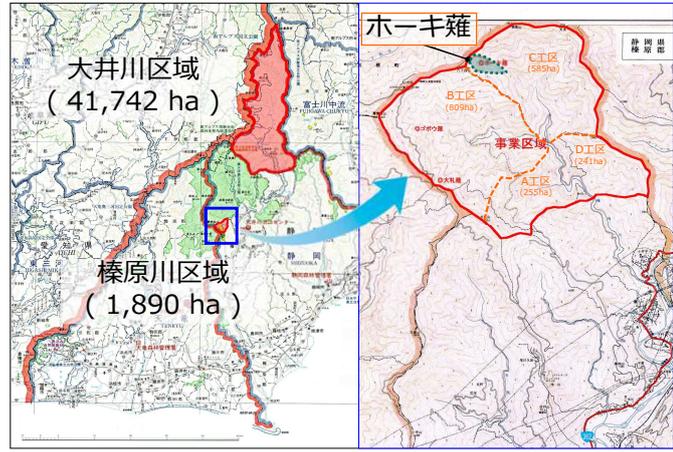
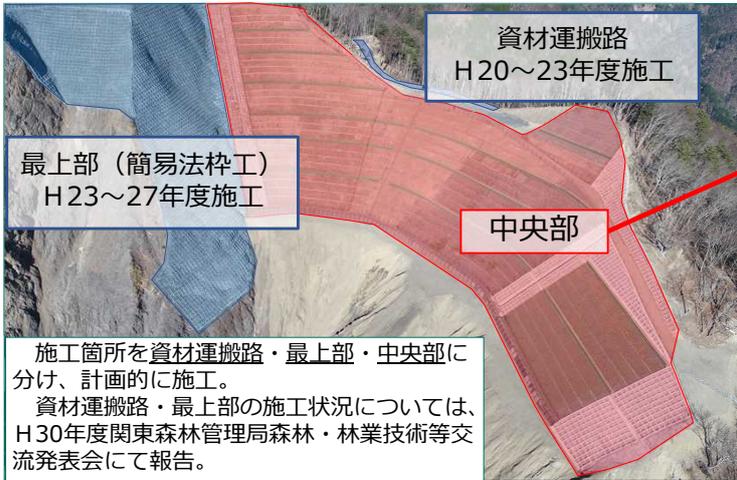


図1.大井川治山センターの事業地とホーキ籾の位置図

今回の目的

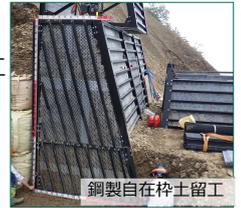
- 崩壊が拡大していた源頭部において、施工が完了したことから経過報告する。
- その経過を踏まえ、これまでの問題点を洗い出し、その対応について整理・考察を行い、今後の復旧対策につなげる。

2. 源頭部の施工状況



中央部の施工状況 (H28~R2年度)

- 施工した工種
 - ・簡易法砕工
 - ・鋼製かご砕土留工
 - ・鋼製筋工
 - ・モルタル吹付工
 - ・植生保護工 など
- 発生した問題
 - ・法面における表面侵食による地形改変
 - ・法面における湧水の発生
 - ・寒風害等による植生マットの緑化不良
 - ・植生マットのシカによる食害



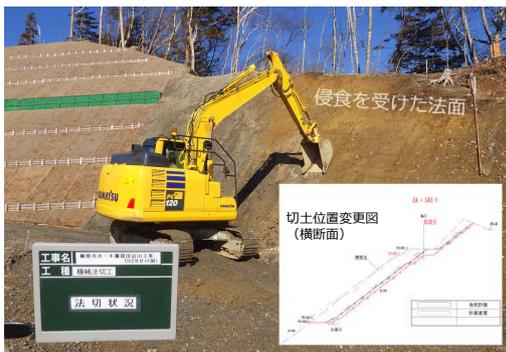
中央部においては、主に、

- ① 侵食
 - ② シカによる食害
 - ③ 緑化不良
- が問題となった。

センターではどのような対策を行ったのか。

3. 問題への取組

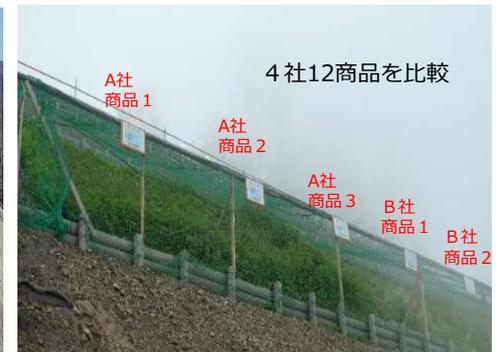
① 侵食等への対応



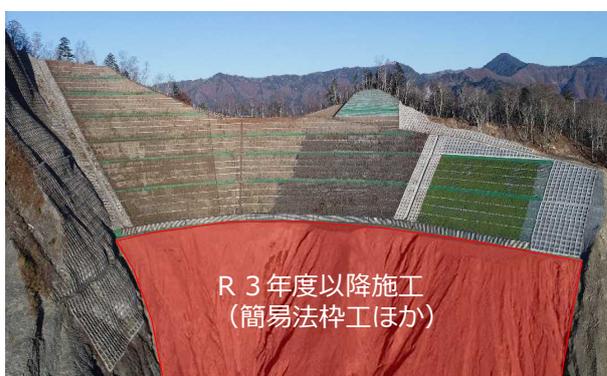
② シカによる食害への対応



③ 緑化不良への対応



4. 考察 (R3年度以降の復旧に向けて)



考察1 これまでに発生した問題に、事前に対応するためには何が必要か

- ① 侵食状況等の地形情報を随時、簡易に入手する仕組みの検討。
- ② 近隣におけるシカの生態情報からシカ柵の要否を事前に検討。
- ③ 各種植生マットの差異と施工環境との相性のデータベース化の検討。

考察2 これからの施工で起こりうる問題に対して何が必要か

- ① 安全を第一とした施工を目指し、受注者との適時適切な協議の実施。
- ② 調査設計と現場との差異が生じた際のデータベース化。
- ③ 今後の復旧において、今回の緑化試験結果の反映。



継続的な情報の収集・集約・蓄積
を行う仕組みづくり